

エリアR～東方航空隊～

玉莊亭翠嶽

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この小説は…なんと言うか、私の脳内妄想を思うがままにズラズラと書いた小説…です。一応キャラクターは東方Projectをベースに、ちよいちよい他作品のキャラも登場させていきたいと思えます…。キャラ崩壊はお許しください…なんでもしますから（何でもするとは言っていない）

目次

第一の話	4
巻一 プロローグ	1

卷一 プロローグ

西暦2056年。人類は突然現れた謎の艦隊『霧』に制海権を奪われ、滅亡の危機に直面していた。そんな中、最新のAI兵器『メンタルモデル』を搭載した潜水艦『伊401』を開発した日本海軍は、紀伊半島沖の海戦で『霧』に勝利、さらにベーリング海峡でも勝利し、北西太平洋の制海権を独力で確立する。さらに勢力拡大を目指す日本海軍は、太平洋にAとZの通し符号が振られた26の傭兵基地を設立し、『霧』の完全殲滅に立ち上がった。物語はその内の一つ、エリアRから始まる…。

南太平洋、ニューブリテン島：

「敵襲ツアー!!」

「まわせ!!」

「3時の方向より敵6隻接近中!!」

「ホワイトハーデス、09番滑走路より出撃！オクタパープルも出撃準備！発進準備のできた機から発進せよ！」

「コンプレッサ始動！」

「エンジン点火！発進！」

「ギアアップ！高度5000ftまで上昇！」

物凄いアフターバーナーの音と共に、たちまち5機が基地の滑走路から離陸し、紺碧の空へ飛びあがっていった。

「敵艦は6隻…1700t級5隻に2000t級1隻。全部駆逐艦よ。」

先頭のRS—24攻撃機が言った。

「幽々子よりコントロール。敵艦の陣形は？」

「こちらコントロール。単横陣と思われませう。」

「了解。全機散開！これより攻撃に移る！妖夢、霖之助は右の2隻！てると椛は左の2隻をお願い。私は真ん中の2隻を潰すわ！」

「了解！幸運グッドラックを祈る！」

「1700t級か…瞬殺だな！」

「あんまり調子乗っていると対空砲喰らうわよ光霖堂！」

「うっせえ因幡兎！少し黙ってる…目標ターゲット視認！魚雷投下！」

投下されたPT80型魚雷が白い軌跡を描いて、敵艦に向かって疾走する。

「3…2…1…」

霖之助は心の中で数えた。瞬間、閃光と共に巨大な水柱が立ち上がった。

「命中！離脱！」

「ほら、今回の報酬よ。有意義に使いなさい。」

そう蓬莱山輝夜は言つて、机の上に五枚の封筒を投げ出した。

「36万か…、まあ1700t級一隻じゃ、こんなもんか。」

と霖之助は言つた。

「ようむ！見て！お金！」

「…幽々子様…はしやぎすぎですよ…いくら貰つたんですか？」

「待つて、今数えるわ…10…20…79万2千円！」

「…戦闘機に乗っている時はあんなに冷静なのに…」

「ん？妖夢、今何か言つた？」

「い、いえ…でも、魚雷補充で20万…整備で10万…50万ぐらいしか残りませんね。」

「そうね…またこの間みたいにか母機動部隊とか通らないかしら？」

「そう都合よくは行きませんよ…。とりあえずにとりの所へ行つて魚雷を買わないと。」

そういうと妖夢は作戦室を出て行つた。

第一の話

ホワイトボードによると、河城にとりは22号ハンガーで作業中とのことだった。2号ハンガーは居住棟から渡り廊下を隔ててすぐの所にある、最も近いハンガーだ。

「魚雷？PT80でいいかい？それとも最新のPT90が入荷したからそれにするか？」

河城にとりは、レンチを指先でクルクル回しながら妖夢に向かって言った。

「いくらですか？」

「…そうだな、PT80はいつも通り10万、PT90は20万取りたい所だが…この際17万でどうだ？」

「…分かりました。17万ですね。現ナマで。」

「現ナマかい…分かった。明日までに機体に着けておくよ。今機体は？」

「3号ハンガーです。」

「機種TZ-41だったな？」

「そうです。」

「分かった！」

居住棟44号室…

「お姉ちゃん…」

「何？フラン。…たく昼間からゴロゴロして…」

「だって…暇…」

「確かに暇なのは否めないわ。」

「少しは私たちスカーレットデーモンズの出番もないものかしらね。」

部屋の隅で横になってテレビを見ていた霊夢が言った。

「さっきの警報は駆逐艦だったみたいだし…ねえ？咲夜？」

「そうですね…ホワイトハーデスの連中が片づけたみたいです。まあ、我々は誇り高き戦闘機乗りですから…奴らは魚雷撒き散らしたらそれで仕事終わりのアタッカーですからね。我々とは仕事の質が違います。」

「そうよ…奴らが1700t級をいくら沈めたところで、私たちにはかなわないのよ。」
と霊夢も言った。

「こっちは敵のF-28やF-36と命のやり取りしてるのよ。あの因幡兎に偉そうな口をきかれる覚えはないわ。」

「…フラン、その辺にしておきなさい？…それにしても、最近暇ねえ…」

「ねえ？レミアア？」

しばしの沈黙の後、霊夢が言った。

「39号室、行ってみない？リークアローの連中も暇してる筈よ。」

リークアロー。「エリアR」の中でも最強の戦闘機乗りと恐れられている5人、すなわち東風谷早苗、八坂神奈子、洩矢諏訪子、霧雨魔理沙、鈴仙・優曇華院・イナバで構成される戦闘機部隊である。39号室は、いわばリークアローの「部室」なのである。

「あ、それ名案だわね霊夢！そうしましょう！」

39号室は、44号室と中庭を隔てて向かい側にあるので、庭を迂回するように廊下を回って行かなければならない。44号室を出た一行は、丁度22号ハンガーから戻ってきた妖夢と会った。

「あら？妖夢じゃない。どうしたの？」

「…魚雷を補充しにハンガーへ行っていました…皆さんこそ、徒党を組んで一体どうしたんですか？」